

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「美知子ちゃんの勇気」

小学四年生の頃の夏の思い出である。いつもの様に友人四、五人と鬼怒川の河原で輪になって皿回しの歌を歌いながら小石を廻して遊んでいた。しばらくするとゴーと音がしたので川上の方を見た。今まで聞いたことのない音だった。すると、今まで穏やかだった川面が大きく膨れ上がり、川幅一杯の水が押し寄せようとしている。危険を感じてとっさに「逃げろー」と叫びながら土手をめがけて一目散に走った。やっとのことで土手の上に這い登り、今いた河原の方を振り返ると、友人の一人が砂地の一尺位の割れ目に足を取られ抜けずに泣いている。水はもうすぐそばまで迫っている。あっ、危ない！ どうしよう！ そう思った瞬間、友人の中でも一番か弱いと思われていた美知子ちゃんが、今やっと登った土手を駆け降り始めた。そして、泣いて動けない友人を引っ張り上げると手をつかんで走った。二人が土手に着いた途端、水が一気に土手のすぐ下まで上がった。すんでのところで水にのまれるところだった。

橋の方を見ると、橋の下ぎりぎりまで水がきている。牛が牛小屋ごと流されてきて、いったん橋の下を潜った後、橋を過ぎるとまた浮かび出て、モーモーと吠えながら流れて行った。川の異変は地震によるものだった。

そうだ、これでは家の者がさぞかし心配して探しているに違いないと我に返り、駆け足で家へ帰った。すると、家では梅干しの壺が倒れて割れてしまい、台所じゅうが梅干しだらけになったと騒いでいる。どうやら私の事など誰も心配しておらず、忘れられていたようで、なんだ梅干しの方がそんなに大事なのかと寂しい気持ちになった。

ただ、この一件で、普段あんなに細くて弱々しい美知子ちゃんが、一番勇気があり行動力があることを知った。そして自分が恥ずかしかった。人助けとはどういうものか鬼怒川地震で教わった夏だった。

夕焼やげんまんげんまんまた明日 久子

「中隊長殿」

私は父になついていたのだが、晩酌の時はいつも父の胡坐の中に収まっていたと女中のおつやさんがよく話していた。小学校六年生の頃、もうとっくに引き揚げの話は途絶え、学校では先生が「未だに帰って来ないのだからニューギニアの隊は全滅だ」と話したことがあった。父にはやはりもう会えないのだと思うと涙が止まらなくなり、男の子に「ちゃ子ちゃん泣いてる」と言われ、先生が慌てて口を閉ざしたことがあった。

そんなある日、「山中中隊長のお宅はこちらですか」と家の前で大きな声がした。終戦になり三年近く経っているのに、軍人さながらの力強い声がした。祖父があたふたと出ていくと、軍服にリュック一つの姿で敬礼をした人が立っていた。その人は「只今中隊長殿は佐世保で憲兵の検問を受けていて二、三日遅れます」と言う。なんと父の帰りを報せに来てくれたのだった。祖父が「ご苦労様でした。一献差し上げたい」と言ったが、「東北に家族が待っているの」と玄関にも入らず帰ってしまった。上官の命令を守り、この一言のために茨城に寄ってくれたのである。戦死したと諦めていた父が帰ってくる！

私は女学生となり、もうすっかり諦めていた時の出来事である。

家の中は、すぐに親戚や元店員達で一杯になった。父は二日して、軍の毛布を一枚入れたリュックで帰ってきた。日焼けとマラリヤの薬で黄黒くなった顔で、我々姉妹の頭を撫で「大きくなったなあ。ああ畳はいいなあ」と言いながら部屋に座った。ニューギニアの話は尽きず、三十センチ位の鼠に寝ている間に足を齧られ亡くなった人の話や、現地人の疵を治してあげて背の高さもあるバナナの束を貰った話をしてくれた。そして、一番の土産話は、部下の中に俳優の加東大介がいて、兵士に演劇指導をして芝居を観せてくれたことだった。椰子の木と椰子の木の間に舞台を作り、玉蜀黍の皮を細かく切って雪を降らせたら、東北の兵士達は泣いていたそうだ。加東大介は、兄が沢村国太郎で、姉は沢村貞子と、舞台役者の一族であった。彼の堂に入った演技のお陰でみんな

元気をもらって生きられたのだという。帰還してから、加東大介から度々手紙が届いたが、書き出しはいつも「中隊長殿」であった。

その後、私が二十三才の頃、加東大介原作、久松静児監督の「南の島に雪が降る」が映画になった。そして、不思議なご縁で私は久松監督の甥と結婚が決まる。生まれたばかりの娘を抱いて初めて実家に帰った時、父は東京駅のホームで三時間前から大阪の方を向いて待っていてくれた。その父も、映画を観て間もなく心筋梗塞で亡くなった。

父の日やさらばラバウルロずさみ 久子